

平成三十一年四月一日発行 第二十九巻第四号
平成三年九月十八日第三種郵便物認可
通巻第三三四号（毎月一回一日発行）

槐 かい

岡井省二創刊

平成31年4月号



冬銀河

高橋将夫

未知の世界へ竹馬で第一歩
手と胸で温度差のあり雪女
大寒の心も乾布摩擦かな
大寒の煙ポキリと折れさうな

雪合戦誰が見方か誰が敵

新雪やシユプールあまた絡みあひ

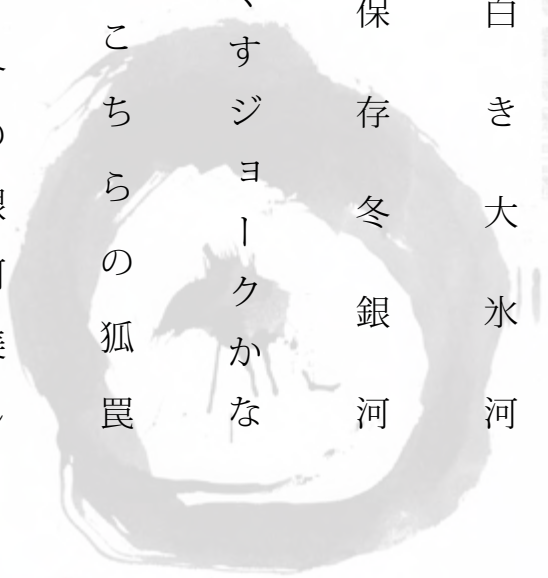
時を封印青白き大氷河

生命の冷凍保存冬銀河

かじかみし心をほぐすジョークかな

人の世のあちらこちらの狐罨

この星に生まれて冬の銀河美し



槐安集

水野恒彦

余生なほ燃ゆることあり寒椿
冬銀河どの道行くも一人なり
春眠の枕返せば夢つづく
冬蝶の光をこぼし影こぼし
太陽を探しに雲へ冬ひばり

加藤みき

裸木に風のメロディありにけり
空濠の側の梅見をゆつくりと
着脹れて杖無用なるこの手足
地下鉄の入庫の音や冬の霧
背筋立て冬木の道を歩きたる

中島陽華

裏阿蘇を嘉す冬の大三角
孔雀来る外套ぽんと脱いであり
ややこしやなんとややこし娑婆の春
クリスマス木魚叩いて笛吹いて
バンウンタラクキリクアクおらが春

竹内悦子

人日や鯨と犀を膝の上
二日続きの冬満月嬰生まる
神の手の雲となりたる初御空
実万両巾着の紐ゆるびをり
花八つ手朱印は大日如来かな



雨村敏子

大寒の気を吸うてをる百会かな
凡の字のゝの辺りが時雨をる
寒九の息吸うてをりけり穴二つ
春近しアンモナイトの渦もまた
空までの一本道や桃の花

本多俊子

いのちまた燃ゆる色なり初明り
冬の木に触れれば父も母もゐる
春隣白犀一頭立つたまま
大宇宙何れに行くも恵方かな
落のたうはや出でて運向いてくる

近藤喜子

待春や天地の光ふところに
風花のやうなひと日でありにけり
寒鯉の心の位置か沈みゐる
咲き遅れまいと冬芽のふくらみ来
日脚伸ぶ夢の近づきくるやうな

瀬川公馨

夢幻界の松球の行方かな
から徳利年神様に嫌はるる
凍雲の切れ端パッチワークにす
観音の左手の水瓶寒の水
冬霞の城塞破りゐたりけり

柳川 晋

ボーとして生きてんぢやねえよ去年今年
寺町の 大黒さん も 初戎
天狼やまだ低すぎる 摩天楼
バーコードを象つてゆく 御神渡
竜天に登りその後はクラウド化

熊川 暁子

万象は円につながり 初明り
もがり 笛赤の 他人と思ひをり
齡かさね 兎の 耳の 欲しくなり
人生の旅に加はる 嫁が 君
バラバラの骨の オブジェや 冬あぢさゐ

寺田 すす江

臘梅の 星となりたる 夕べかな
冬薔薇ひとひらごとの 祈りかな
凜凜と 無念 無想の 弓 始
牛の 舌濃き 桃色の 寒九かな
氷面鏡突^つきあしたを 思ひをり

岩下 芳子

諸を抱へ抱へて 山眠る
一椀やいま煮えば なの 蜆汁
寒蜆砂に潜つて 肥りけり
生誕碑のまはり 山茶花 咲き誇る
冬川原 凹い所に 日を溜める

有松洋子

きのふより勁き眼をして年迎ふ
初夢はドローンの速度の風となり
休耕田増えし村なり冬の鵲
胎内の安らぎに似し羽蒲団
楳足すや炎一瞬甘やかに

岩月優美子

人生はプラスマイナス年明くる
初明り山は薄目を開けにけり
凍雲を吹き飛ばしてよ風の神
春を待つ心も身をも宥めつつ
日脚伸ぶ恋のはじまる気分かな

近藤紀子

禁色のあら玉の日に手をかざす
きりぎしに冬の黄葉残しをり
お吟さまひたひた来る冬の夜
白息を耳に吹き込み別れ来し
鬼どもと笑ひころげる女正月

竹中一花

天津国の天津風音大且
染めあげし色は茜や初仕事
夜青き空に揺るるや戎笹
白鳥の風読む朝遠高嶺
水を蹴る音を残して雁帰る

前田美恵子

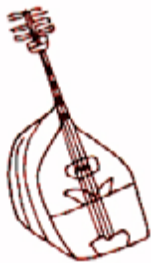
初御空生駒嶺古都を隔てたる
寒鯉の潜みし泥のほの紅し
折紙の鶴出来上る小春かな
寒晴や空瓶藍の色返す
立春の風吹き入るや大手門

中田禎子

蓬葉を往き来してをる初鴉
喜寿の背に翼をつけむ初御空
古里や野老の苦さ舌にある
一枚を守る幼児歌がるた
ほつこりと妖精の宿枯葎

吉田順子

海光をうけ金泥の石蒔の花
杉山に檜そろひ立つ初御空
白梅の無垢やいのちの糧となり
雪割草咲いて心に灯るもの
引鶴の声たかだかと北を指す



槐市集

犬塚李里子

どんど焼き未来へこころ飛ばしたり
平成も終りとなれる 粥柱
寒紅やときめく事の欲しき日よ
枯野ゆくところに強きもの抱き
我逝くも時雨の過ぐるほどのこと

井上静子

足元の氷に強き意志のあり
子の靴に左右のしるし梅の花
雪催ペンに親しみをりにける
手袋の刺繍大きく見せびらかす
男気の胡坐に煙管寒牡丹

今井充子

見馴れたる三角屋根の初景色
白黒の猫と戯る 初鴉
遠路なり近しい声の松の内
春浅しプランターの芽競ひをり
元朝の郵便受けをいそいそと

岩田洋子

松の内の大吟醸なり霽れてきて
真青なる海に向かうて石路の花
白障子他人行儀となりにける
ささやかなことの幸せ藪柑子
冬の海達磨のやうな日が落ちる



藤田美耶子

どんど火に社殿の鳳凰飛びたてり
記念樹の根に張る縄に淑気かな
呼びおうて声確かめり初鴉
焚火してふと口ずさむ愛唱歌
沈黙は時に雄弁冬薔薇

三浦純子

寒椿四ツ目垣の辺散り敷ける
七草粥食して思ふ明日の事
初日差す法隆寺への石畳
信楽やたぬきと人と日向ぼこ
博物館仏像見入る手の温くし

三木 亨

起き抜けに此の世ひづまず初鴉
初山河潜水艦のハッチ開け
アパートの初日に乾く男物
ぽつぺんを鳴らす三十路の深吐息
寒九の雨杭一本になる川鵜

安野眞澄

初暦の予定赤丸いくつなる
コーヒーの湯気たちのぼる三日かな
年輪の心の襞や初鏡
善悪は誰にもありし竜の玉
駄菓子屋にばあさんがゐて着ぶくれて

柳橋繁子

手水舎の杓の木の香や初御空
元朝の厨の床の軋みかな
人日や三里に灸をすゑてをり
初日の出観音岩に人の影
福は内鬼も内なり蔵王堂

山田佳子

年暮るるラジオは第九流しをり
鈍色のピアス転がるお正月
読み手なる子のもたつきの歌留多かな
三昧はしんどい事よ松七日
大寺の屋根に閑かな寒の月

槐集

高橋将夫選

勾玉の形となりたる雑煮餅
枚方 中 貞子

日溜りのこの部屋が好き女正月

春満月の大きな胸に仕舞ひける

葉に光ありし動きや春障子

よきご縁待つや真白き糸玉

風花す遥かな人の便りかも
岡崎 犬塚李里子

若者へ言葉を選ぶささめ雪

寒玉子置かれて神の啓示めく

雪といふ軽きものまた重きもの

冬草とあなどり引けば根の深し

正解を誰も知らぬ世初茜
守口 三木 亨

恋を知り歌留多とる手の厳しかり

裏返る淑気と狂気交差点

大地凍つ人の命のトリアージ

真空に音は無きは寒の月

初山河すつくと伸びし心柱
大阪 藤田美耶子

対立の海へこぎ出づ宝船

注連飾る昭和は遠くなりけり

海のぞむ松林の空鷹の空

信仰を持たずさまよふ大枯野

あの世にも風花舞へば逝くもよし
江島 照美

寒月や青き光に捕らはるる

剃り跡を指でなぞつてひめ始

薄氷のたゆたふ光あたたかし

長生きもここまで来たか寒蜃

虚仮の世も報恩謝徳の笑初
平野 多聞

念仏は胸に咲く花福寿草

百僧の大地若経淑気満つ

寝正月地球自転の音聞かむ

鳥帰る富士の残雪乱吹く中

銀河往來

◆槐集觀照

よきご縁待つや真白き毛糸玉 中 貞子

よい縁と毛糸玉の取り合わせに感動。きつと無垢のやわらかな縁に巡り合うことだろう。

「日溜りのこの部屋が好き女正月」と「春満月の大きき胸に仕舞ひける」の句からは作者の豊かな心情が伝わってくる。

「勾玉の形りとなりたる雑煮餅」は雑煮の餅から勾玉への飛躍が俳諧。

「葉に光ありし動きや春障子」は繊細な感性の句。
以上、どの句にも心あたたまるものがある。

若者へ言葉を選ぶささめ雪 犬塚李里子

「言葉を選ぶ」に世代のギャップを克服しようとする苦心のほどが窺われる。「ささめ雪」は細やかな心遣いの象徴なのだろう。

「雪といふ軽きものまた重きもの」と「冬草とあなどり引けば根の深し」はどちらもこと、ものの本質に迫る。

「寒玉子置かれて神の啓示めく」の句、言われてみるとなんとなくそう思えてくるから不思議だ。

大地凍つ人の命のトリアージ 三木 亨

トリアージは災害等で多くの負傷者を治療する時、負傷者に治療の優先順位をつけること。最も有効な救命作業を行うため

のものが、命に優先順位をつけることに変りはない。「大地凍つ」にその重みが託されている。

「正解を誰も知らぬ世初芭」、〈恋を知り歌留多とる手の厳しかり〉、〈裏返る淑氣と狂気交差点〉、〈真空に音は無きはず寒の月〉はどの句もこと、ものの本質に迫る。

対立の海へこぎ出づ宝船 藤田美耶子

「対立の海」は昨今の海洋事情を思わせるが、「宝船」を持ち出したところが俳諧。

「初山河すつくと伸びし心柱」は心柱で句の姿が決まった。

「信仰を持たずさまよふ大枯野」の句、信仰の是非はともかく、長い人生では何か心の支えがほしいことは確か。

あの世にも風花舞へば逝くもよし 江島 照美

たしかに、そんな世界なら一度見に行っても良いと思う。

「寒月や青き光に捕らはるる」の句、「青き光に捕らはるる」の詩情はこの作者ならではのものの。

「長生きもここまで来たか寒蛭」の句、まさに実感。感無量。寒蛭は長寿へのいたわりなのだろう。

虚仮の世も報恩謝徳の笑初 平野 多聞

報恩謝徳とはまたむつかしいことを言うが、笑初で万事めでたしめでたし。

「念仏は胸に咲く花福寿草」と「百僧の大般若経淑氣満つ」はどちらもこの作者の署名入りの句といえよう。

〈以下略〉